

日時：平成二十五年十一月十三日(水)
場所：さわやかタウン



さわやか愛知

緊急ナイトサービス 職務紹介



(事例より抜粋)

ナイトサービスについて

職務は、二十一時三十分から日中の業務担当者から引続き、翌朝八時三十分まで、さわやか愛知事務所を拠点に電話での対応・出勤介護等のサービスを提供します。

(事例その一) 精神疾患を患われて

早朝四時頃。

「リリー、リリー」

ヘルパー「さわやか愛知です。どっかなさいましたか。」
しばらく応答はありませんでした。

「どっかなさいましたか。電話の声、聞こえていますか」
すると、男性の暗く低い声で、「今、何時ですか？。分からないもので……」

少し声が震えていたように聞こえました。時間をお伝えすると「そうかね……今時間がわからなくなつたもんでね。ありがとつ。」と電話を切られました。時間をお伝えした後は、声のトーンが少し明るくなつたように感じました。私は、電話を切られた直後「こんな早い時間でも明日の早朝でも……」とひい思いが頭をぎぎりました。しかし、痛いゆえに深夜であっても今、何時なのかを思い続けることほとても不安なこと、早々に電話をかけ会話を通して時間が分かつたことで、気持ちが一変になり「ありがとつとおつしやつたのだと思います。」

深夜の一本の電話が安心感・安堵感を抱いて頂ける役割を担っていることに気づきました。

(事例その二) 車椅子 利用者

「リリー、リリー」

ヘルパー「さわやか愛知です。どっかなさいましたか。」

利用者様「ベッドから落ちて、おしっこをしてしまいました。来てくれ。」

酔っておられるのか、呂律が少し回らない声でした。出勤を急ぎ、到着時に目のあたりにした光景は、床に倒れ、動くことができず、寒さを唇は青く震えている利用者様でした。衣服は尿でビしょビしょに濡れ、冷たく寒いので着替えを急ぎました。その後、ベッドに移そうとしても利用者は大柄の方で私ども二人の力でも到底及びませんでした。「利用者様にベッドの上がつて頂く為に、できるだけ力を貸してくださいね」とお願いすると不自由な体で、力いっぱい力を振り絞り少しでも力になろうとする気力が伝わってきました。その結果、三人で力を合わせた共同作業となりました。以前は、短気な性格の「利用者様と思っておりますが、それとは全く異なり、笑みを浮かばせながら、安心された表情で「ありがとつ、ありがとつ」と繰り返し返されていきました。

私はこの出勤の際に、「このサービスがなかったらこの利用者様は……。」と頭をよぎりました。ナイトサービスを必要とされておられる方の対応に携わっていることに誇りを感じました。

(事例その三) 認知症の老夫婦 二人暮らし

「リリー、リリー」

ヘルパー「さわやか愛知です。どづかなさいましたか。」

電話口の方は、「私は横浜にいます。九十歳になる父から認知症の母が大便を漏らし、どうしていいのかわからないと電話があったので家に訪ねてもらえませんか」と話されました。ナイトサービスの「登録者ではない」という理由から出動を迷いました。しかし、誰も手を差し伸べる当てがないケースとして出動いたしました。

幾度も電話で連絡を取り合い、やっとの思いで依頼人の御両親の「自宅近く。深夜三時、その中で歩くこともままならないおじい様が、肌着一枚でトボトボと道路へ出て、私達を自宅へと導いてくださいました。部屋には大便があちらこちらに排泄されており、それを身体中にくりくりのようにこねりつけておられました。着替えを済ませ、大便を片付けて帰る身支度をしていると、「ありがとう。ありがとう」と繰り返し返され、目から涙が潤んでおられました。

その言葉はしばらく私の耳から離れることはありませんでした。

少ない経験の中から事例を挙げご紹介をさせて頂きましたが、他にも多くの介護・支援活動を行っています。

ナイトサービスを必要とされる方の緊急隊として「ありがとう」と微笑みを糧に、努めてまいります。と思っています。